

館報 教育記念館

No. 99
令和4年11月 発行

今も残るとやまの「青い目の人形」7体



特別企画展 「とやまの教育史料 青い目の人形展」

主な内容

◎教育時評 富山県中学校長会	会長 白江 日呂雄	2
◎第32回 郷土の先賢顕彰者紹介	原 信夫	3
	吉田 実	4
	酒井 静女	5
◎企画展 「郷土の先賢展 とやまを拓いた女性たち」		6
特別企画展 「とやまの教育史料 青い目の人形展」		
◎恒例展 「第20回さんすうワールド展」		7
◎「きらめき未来塾」 思考道場 お笑い道場 右脳活用道場		
◎令和4年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業		
◎恒例展 「第19回子どもの目 自然不思議発見写真展」		8



発行所／公益財団法人 富山県ひとづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)
発行人／富山県教育記念館 館長 富田 利通 印刷所／いおざき印刷株式会社



一人一人を見る

富山県中学校長会会長

会長 白江 日呂雄

国語教師として50年にわたり教壇に立ち続け、研究家としても広く知られた大村はま先生の著作に『教えるということ』がある。内容は、1970年の夏に新規採用教員研修会の講師として来県された際の講演である。その中で、「子ども一人一人を見る」ことについて触れておられる。

「要領のいい言い方で『中ぐらいの生徒を目標てに授業を進めればよい』とどこかで聞いたことはありませんか？誰のことでしょうか、中ぐらいの生徒とは。そんなことは、教えたことのない人の、子ども一人一人を見つめて話をしない人の空論です。」「一斉授業であっても、一人一人を見ているということです。個人にしたり、集団にしたり、小グループにしたりいろいろな方法があるけれども、つまりは個人を伸ばすことが中心であると思います。」

私が若い頃勤務した学校は、いずれも所謂荒れた学校で、日常の生活指導や問題行動への対応が私みたいな若造であってもしっかり求められた。授業でも何でもきちんとさせようと思うから、どうしても生徒のできていないところや不十分な部分に目が行き、注意や叱責ばかりしていた記憶がある。大村先生の「一人一人を見つめて伸ばす」は全然できていなかったというか、その必要性をあまり感じていなかった。

ある日、妻と保育園の息子の3人で小学校の運動会に出場する娘の応援に行った。娘は運動が大の苦手で、徒競走は昨年も最下位だった。今回は、少しでも速くなるため授業でしっかり練習していると言っていた。徒競走が始まり、案の定スタートから遅れた娘は、前を走る一人に追いついたがわずかに届かずゴールした。コースの横で見ていた私たちは、やっぱりビリ

だの走り方が悪いだの文句ばかり言っていたが、ゴール近くで応援していた息子はそれこそ飛んできて、「お姉ちゃんかっこよかったねー」

「僕も走りたくなったわー」と真顔で走るまねをした。私と妻は思わず顔を見合わせてしまった。そして走り終えた娘が駆け寄ってきて、「惜しかったー、でもいい走りだったでしょ」と言い、息子の「かっこよかったよ」の言葉に「まあね」と両手を腰に当て胸を張る姿は、まるで1等賞にでもなったかのように一瞬輝いて見えた。息子はそれを見ると、「走ってくる」「トーツ」と叫びながらまた飛んでいくし、娘は満面の笑顔で「次は応援頑張らなくちゃ」と言って団席へ戻っていくし、娘と他の子をたっぷり比較し順位を気にしていた私たちは、キラキラした目で姉だけを見ていた息子に教えられ助けられた。あっぱれである。当時は、中学校の相談室担当として勤務校や校区の小学校の保護者や教職員に「一人一人の良さに目を向けてほしい」と熱弁していたものだから、恥ずかしいとしか言いようがなかった。

今、子供たちを取り巻く環境は、少子高齢化やグローバル化が一層進むとともにAIやビッグデータ、IoT、ロボティクス等の先端技術が進展・普及するSociety5.0時代を迎えている。学校においても、GIGAスクール構想が加速度的に実現し、学習端末を利用した遠隔地の学校や地域（海外）との授業や交流、データサイエンスやAI講座等、今までできなかった学習活動が可能となっている。従来とは違う形の学びは今後も増えていくかもしれないが、教師は、いつの時代でも「一人一人を見つめて、良さや可能性を見つけ、伸ばす」姿勢を崩してはいけないと自戒を込めて強く思うのである。

第32回 郷土の先賢顕彰者紹介

3階 郷土先賢室



富山が生んだ 日本ジャズ界の先駆者・牽引者

原 信夫 (1926～2021)

原信夫（本名 塚原信夫）は、ジャズ界の『ビッグボス』であり、シャープス・アンド・フラッツのリーダーとして、一世を風靡した。大正15年（1926）11月19日、樺太（現サハリン）で生まれ、家族で滑川町（現滑川市）に移住。間もなく実母が亡くなり、東岩瀬で漁業を営む塚原家の養子になった。音楽との出会いは、尋常高等小学校で音楽教師からコルネットを渡され、「吹いてみる」の一言から始まる。

卒業後、富山市の機械工業青年学校へ入学し、テナーサックスと出会う。昭和18年（1943）、海軍軍楽隊に入る。終戦後、軍楽隊の先輩から「ジャズをやろう」と誘われ、ジャズミュージシャンの道へ進むことを決意した。昭和26年（1951）にシャープス・アンド・フラッツを結成。活動範囲を広げるとともに、個性豊かなアレンジでコンサートバンドとして人気を博した。また、アメリカの一流楽団の演奏スタイルを吸収、躍動感のあるその演奏は海外の音楽家からも注目された。昭和34年（1959）NHK交響楽団との共演が好評を博し、2年後に再共演。さらに、日本フィルハーモニー交響楽団とも共演した。これらを通して日本にジャズが少しずつ浸透していった。同時に、「日本人ならではのジャズ」の確立を目指し、昭和42年（1967）には、世界のジャズミュージシャンの檣舞台だった米国ニューポート・ジャズ・フェスティバルに日本人として初出演した。自作の「古都」や「ソーラン節」など邦楽を交えて演奏し、ニューヨークタイムズ紙などから絶賛され、高い評価を得た。

平成22年（2010）2月11日のコンサートを最後に、原は音楽活動に終止符を打った。ビッグバンドを60年余り結成し続けられたのはなぜか。ひとえにその人柄によるところが大きい。ビッグバンドは大所帯だから、人間関係が難しい。運営するスタッフもいるから、維持することは大変なことである。原は、誰とでも親しく付き合い、包容力と統率力があつた。これがバンドのサウンドにも出ていた。結束力、まとまりがある音、素晴らしいアレンジを起用してアレンジも新しかった。こうしたバンドへの姿勢は、現在に至るまで、後世のジャズミュージシャンたちにも大きな影響を与えている。

活躍はジャズにとどまらない。シャープス・アンド・フラッツの演奏による「富山県民の歌」（第13回富山国体歌）のレコード化。9回に及ぶNHK紅白歌合戦紅組の演奏。また、美空ひばりの「真赤な太陽」の作曲も手がけた。さらに、平成2年（1990）頃から、原自身やバンドの所属メンバーが、全国の学校のブラスバンド部を訪れて音楽の指導をしたり、若い音楽家の活動を支援したりした。

長く日本ジャズ界を牽引し、日本の音楽文化への貢献度が評価され、昭和63年（1988）紫綬褒章、平成10年（1998）勲四等旭日小綬章を受章した。

平成20年（2008）11月1日から始まったファイナルコンサートツアー（8日富山で開催）に寄せて、原はこう告げた。「生涯かけてきたジャズを新たな世代に託す。ジャズを愛し、出会えたことに感謝している。信じ、崇めている。神様のようなものだ。ここまで続けることができたのは、そんな思いからだ。ジャズは人生そのものだ」と。この言葉通りの生涯を送り、令和3年（2021）6月21日逝去。享年94歳。

＜専門員 平野 強＞



シャープス・アンド・フラッツ（黒いスーツが原氏）
（額賀真理子氏提供）



クインシー・ジョーンズと（『# & b 50年誌』より）



県土躍進という夢の実現に取り組んだ 民間出身知事

よしだ みのる
吉田 実 (1910～1982)

明治43年（1910）3月19日、射水郡大島村（現射水市大島）に、父元吉の長男として生まれた。

昭和31年（1956）、富山県知事に立候補した。県政界を二分するまれに見る激しい戦いであった。大島村長で農協連合会役員として農政に優れた見識をもつ吉田は初の民間出身知事として、4万7千票の大差を付けて初当選を果たした。以後、4期連続で当選し、昭和44年までの13年間、県政をリードした。

まず、高辻武邦 前知事時代の「富山県総合開発計画」を引き継ぎ、戦後の計画県政の基礎を固めた。この計画は、荒れた県土を復旧し、水資源の開発を軸に農業・工業の開発・発展を図り、県民生活の向上をめざすもので、全国に先駆けて策定された大計であった。

昭和34年（1959）、吉田の著書『野に山に海に』がベストセラーになった。それは、吉田が時代の先を見据え、引き継いだ計画に修正を加え、県政の基本方針（夢）として世に問うたものであった。「野」の夢とは、農業技術の向上、大規模圃場整備の促進、機械化による省力、有畜農業などを中心にしたものである。「山」の夢とは、立山黒部の開発と観光の大衆化であり、いわゆるアルペンルートの開通である。昭和35年 立山黒部有峰開発株式会社の設立、同38年 黒四ダム完成、同44年 立山トンネルの貫通、同46年 アルペンルート全線開通と進んだ。「海」の夢とは、富山新港の開港である。新産業都市の要としての富山新港の港湾整備と射水地区の乾田化を一挙に成し遂げるという吉田の強い思いのもと、昭和36年9月に着工、同43年4月に開港へと進んだ。新港後背地には工業地帯を造成し、また、これらの住宅地として太閤山ニュータウンを造成した。これら大事業には幾多の困難を伴ったが、着実に成し遂げた実行力には目を見張るものがあった。

また、昭和33年（1958）に開催された富山国体では、全国初の試みだった民泊が好評で、県民挙げての国体協賛の気運が高まるとともに、親切的な富山県民のイメージを全国に広めた。この時選定された「富山県民の歌」もまた、県民の団結と意識高揚に効果があった。

この他にも、町村合併の推進、県立大谷技術短期大学（現富山県立大学工学部）の創設を始めとする教育の振興、道路舗装・除雪の促進や富山空港の開港など交通網の整備等、多くの政策に取り組んだ。

昭和44年（1969）、松村謙三、正力松太郎の引退表明を受けて国政に転身、知事を辞して衆議院選挙に出馬しトップ当選を果たす。同49年、参議院選挙に圧勝して国政に復帰、同55年に再選した。得意の農政の他、文化財保護、エネルギー対策等、様々な分野で活躍したが、体調を崩し、昭和57年（1982）、11月16日、逝去。県土躍進という夢の実現に取り組んだ生涯であった。享年72歳。

<専門員 眞田 武志>



吉田の著書「野に山に海に」



新港整備計画概要図(左著書より)



新湊地区航空写真(令和3年12月14日撮影)
(国土交通省北陸地方整備局提供)



柔らかな作風で 生涯現役を貫いた女性蠟型原型師

さかい しずじょ
酒井 静女 (1909～1992)

酒井静女（本名 静江）は、明治42年（1909）10月10日、岐阜県土岐郡（現瑞浪市）の半農半陶を営む家に生まれた。昭和7年（1932）、23歳の時、蠟型鑄物2代目須賀松園（昭和49年 人間国宝）に嫁いだ姉のお産を手伝うために高岡を訪れた。家事を手伝う中、優雅で繊細な松園の作品に魅せられた静女は、弟子になることを望むようになった。しかし、松園は「女性に務まる仕事ではない」と入門を許さなかった。そのような中、松園やその弟子たちと訪れた岡山県倉敷市で、幅1メートルほどの銅製太鼓を見た。蠟型鑄物のもつ人間味ある柔らかさに強くひかれ、その世界に入る強い決意を抱いた。

昭和14年（1939）ごろ、ようやく入門を許された静女が任された仕事は竜のひげ作りであった。長さ数センチメートルの竜のひげを蠟で作り、松園に差し出すのだが、不揃いであつたり丸みがなかったりすると、何度も作り直すよう求められた。松園からは「心が肝心、技術は後からついてくる」「日常生活の細かいところから真実を見るように」と教えられ、制作態度や生活面まで細かく指導を受けた。

昭和18年（1943）、34歳の時、初めて文展（現在の日展）への出品が松園に認められた。感激に満ちた静女は、白菜をかすり模様で表現した花瓶を制作し、初入選を果たした。当時、金工部門での入選は女性では珍しいものであった。翌年には芸術保存資格者としての認定を受け、蠟型原型師として高い評価を得た。しかし、時局は静女に制作に没頭する時間を許さなかった。戦中・戦後の苦しい生活の中、静女は時に知り合いの農家を回って食料を求め、時に松園の蠟型をリアカーに載せて焼成できる鑄造窯を探し回り、須賀家の生活を支えた。

昭和24年（1949）頃、松園が高岡市中川町に新工房を設けた。新工房には、美術関係者や新聞記者、会社役員などが頻繁に訪れた。静女は制作に励む傍ら、姉と共に客人をもてなした。静女の行き届いた心配りは職人たちと世間をつなぐ潤滑油としての貴重な役割を担った。

松園の厳しい教えの下、静女の技法は磨かれていった。静女が得意とした「火舎（^{ほや}仏事に用いる蓋の付いた香炉）」は、高さ5センチメートル程である。モチーフは、サザエやカニをはじめ、井戸をのぞく人の姿もあり、精巧を極めたものである。女性ならではの繊細かつ柔らかな作品の数々は、静女の豊かな感性と柔らかな手指によって生み出された。富山県展での知事賞受賞や日展での数々の入選を経て、昭和49年（1974）、65歳の時、松園より「お前は一人でやっていける」という言葉をもらった。入門から30年以上がたち、ようやく一人前の職人として認められた瞬間だった。静女は、師の教えに応えるため、そして人生をこの道に捧げると決めた信念を貫き通すため、一層根気強く制作に取り組んだ。昭和62年（1987）に白内障を患い、細かな作業ができなくなったが、手術によって視力が回復。再び制作に打ち込める喜びから、月に20作品を制作することもあった。銅の冷たさや重たさを感じさせない温もりのある静女の作品は高い評価を受け、数々の個展が開かれた。

平成4年（1992）に他界。「手が止まったら、死んだらと同じ」と晩年まで制作を続け、生涯現役を貫いた。
＜専門員 松田 啓宏＞



蠟の柔らかさを生かして龍を製作する



唐草透香爐（鷺北隆一氏蔵）



SDGsの実現に向けた行動がより一層求められるこの時にあたり、多様性を認め合う社会の実現に向け、ふるさと富山を、そして日本・世界を支えようと尽力した女性の先賢17名の業績や生き方を、その肖像写真等を通して紹介しました。



・地元富山からこのような素晴らしい功績をあげた方々がいらっしやることが分かりました。そして、素晴らしい人でありながら、悩み、苦しむ時期があったと分かり、勇気を頂いた気持ちになりました。子供たちや若い方々にぜひ見てほしいなあと思いました。



多様性を認め合う社会や国際平和を希求する声が改めて高まる今、県内に現存する「青い目の人形」7体を一堂に展示。広く紹介するとともに、人形に込められた先人たちの願いに思いを巡らせ、その今日的意義を考える機会としました。新聞等でも多く取り上げられ、多くの方が参観されました。



・青い目の人形が、平和のために送られていたことは知らなかった。平和を考えて語り合う事は大事だ。
・知識として知っていましたが、実物を目にすると、より心に迫ってくるものがあります。
・自分や子供たちの母校にも贈られていたことを初めて知りました。学校でも是非取り入れてほしいと思いました。一人でも多くの子ども心に、人形たちが無言で伝えるメッセージが残りますように。



夏休み期間中に算数の面白さを味わってもらおうと21間のクイズや14種類の立体パズルを展示しました。楢円ビリヤード等の大型教材（秋山仁先生が中心となり開発・製作）が好評でした。多くの家族連れが訪れ、考える楽しさを味わっていました。



- ・たのしくべんきょうになるので、とてもたのしかったです。らいねんもきたいです。(小学生)
- ・短い時間でいろいろな面白いクイズができた。(中学生)

きらめき未来塾（夏休み期間中）

子供たちの創造力や表現力、柔軟な思考力を養うことをねらいに、今年度も3つの道場を開催しました。参加した子供たちは、講師の先生方にいろいろなことを教えてもらい、チャレンジしながら大いに活動を楽しむことができました。

☆思考道場 特別講師 秋山 仁（東京理科大学栄誉教授）
講師 西尾尚起 窪田稔彦
小澤愛実 小里卓己
神田将義（以上5名 県内小学校教員）

☆お笑い道場 講師 安野家 仁楽斎（社会人落語家）

☆右脳活用道場 講師 森 みちこ（漫画家）



思考道場 ～秋山仁先生の特別授業～



思考道場 ～dLますの不思議～



お笑い道場 ～お笑い大会～



右脳活用道場 ～漫画原稿の制作～

令和4年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業

《助成対象校1校に10万円助成》

子供が地域の人や自然、歴史、文化にかかわる「ふるさと学習」等に地域と連携し取り組む学校に助成する事業です。

今年度は次の5校が助成校となりました。

・助成校・

富山市立上滝小学校
富山市立音川小学校
射水市立中太閤山小学校
高岡市立川原小学校
南砺市立城端小学校



令和3年度 助成校の1校
高岡市立西条小学校(西条再発見)

8月31日(水)～9月29日(木)

子供たちが、学校での学習や日頃の生活の中から、その目を通して発見し、撮影した自然界の「不思議」「きれい」「おもしろい」を紹介した写真173点を展示しました。たくさんの「いいね!」が集まりました。



・ふだんにげなく見ている風景や虫たちをじっくりと見ることができました。思わず笑ってしまったり、驚いたり、写真からもいろいろな発見があり、心がきれいになりました。



はっぱのめいろ (1年)



今にも走りそうな大根 (3年)



本物はどっち～? (5年)



ふしぎなつつじ (2年)



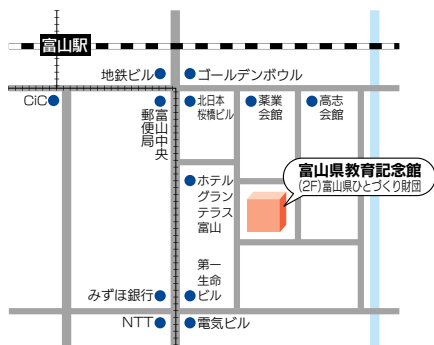
巨人上陸 (4年)



ひまわりの背中 (6年)

これからの展示等の予定

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| ・ 児童・生徒によるものづくり展 | 10月19日(水)～11月13日(日) |
| ・ 富山県造形教育作品展 | 11月19日(土)～12月4日(日) |
| ・ アイディアロボット展 | 12月10日(土)～1月8日(日) |
| { 高校生ロボコンフェスタ (県民会館 地下1階展示場) | 12月11日(日) |
| { 小学生ロボットづくり教室 (弊館 5階会議室) | 1月8日(日) |
| ・ 富山県中学校美術展 | 1月20日(金)～2月5日(日) |



公式Twitter

https://twitter.com/t_hitozukuri

財団の取組みや富山県教育記念館の展示情報を掲載しています。ぜひ、フォローをお願いします。



教育記念館HP

<https://www.t-hito.or.jp/>

随時更新しています。



あ・と・が・き

表紙の写真は、青い目の人形展終了後に撮りました。初めは緊張した表情に見えましたが、今は晴れやかな表情に見えます。この館報がお手元に届く頃には、郷土先賢室で新しい顕彰展が始まります。どうぞお出かけください。最後に原稿をお寄せ下さった方々に感謝申し上げます。